

望 遠 鏡

H A R U K I

小兒が大きくなると、玩具では濟まなくなつて、蓄音器やピアノを買つてくれとせがむ小兒だけでなく、私も近頃欲しいものが多過ぎて困る。差しあたり望遠鏡のいゝのが欲しい。

この7月のある夜、大道商人が路傍に据えつけて人々に覗かせてゐるのを私もちよつと覗いてみた。斜に傾いた土星の輪が、はつきり見えたときは、小兒のように私の心は躍つた。

これが病みつきで、私は星についての書物を漁り廻るようになった。伯父のかたみに貰つた望遠鏡を持出して、日が暮れると、ベランダに椅子を並べて、女の兒と、かはるがはる大空をうち仰ぐのである。3倍ほどにしちか擴大されぬ安物の眼鏡であるが、それでも、スバル星のような肉眼で見え難いものが、どうやら存在らしいものを見得るのは愉快である。

秋になると、大空が澄みきつて、星を見るに適した時期になる。麻雀や圍碁の遊を知らぬ私は、せめて多忙な地上の生活の中に大空への憧憬を注ぎこんでみたい。かうなると、いよいよ素晴らしい望遠鏡が欲しくなる。

單に詩人的な空想を弄するための星の研究から一步出て、科學、ことに自然科學の原野に横はる驚異と神秘を地上の生活に於て味はひたい願からの、星を抱く大空についての想像は感傷詩人の道樂ではない。

私は山本一清先生が讀賣紙上で紹介された英國の天文學者A.S.Eddington氏に尠からぬ興味を惹かれ、氏の著書を手にしたのであるが、この世界に入り込むには數學、物理學の基礎のない者には無理である。それでも私は不思議な魅力に追ひ立てられて讀むことをやめられない。自然科學—哲學—宗教、さうした經路を辿つて、人生を見なほし、唯物史觀を單に流行として迎合するのではなく、取捨自らよろしきになつた行き方は靜かなそして力めてたゆまぬ科學の世界に存すると思ふ。